

第24回

学祖・下田歌子展

— 愛国婦人会と夜間女学校 —

2025年4月1日(火)～4月25日(金)

実践女子大学香雪記念資料館 企画展示室1・2

[凡例]

- ・本リーフレットは実践女子大学香雪記念資料館企画展「第24回 学祖・下田歌子展—愛国婦人会と夜間女学校—」(2025年4月1日～4月25日)に際し、発行するものである。
- ・本展は、元実践女子大学香雪記念資料館専門委員大塚宏昌(元実践女子大学図書館部長)の企画に基づき、本リーフレット解説文は大塚宏昌が執筆した。
- ・[]内の記載は推定事項。
- ・展示資料はすべて、実践女子大学図書館の所蔵。また、資料名の末尾に〈 〉で示した出納番号は、女子大学図書館『下田歌子データベース』(<https://opac.jissen.ac.jp/repo/repository/shimoda/?lang=0>)に対応する。

愛国婦人会

愛国婦人会は、明治34(1901)年、奥村五百子の呼びかけに、呼応した近衛篤磨貴族院議長、小笠原長生子爵などの明治政府の顯官およびその夫人たち、女子教育者などの名流婦人が発起人となって創立された日本初の公的な支援を受けた全国規模の婦人団体です。その発会に先立ち、会の趣意書を起草したのが、下田歌子です。

奥村五百子は、九州唐津の真宗東本願寺派の寺に生まれ、53歳で韓国布教を本山に申し入れ、韓国内の実情を視察し、韓国光州に実業学校を設立しました。また明治33年に勃発した義和団事件に出兵した日本兵の苦難を現地で見ると耐えず、本山へ慰問団の派遣を要請し、戦死者の遺族への援助を目的に愛国婦人会を設立しました。愛国婦人会は、名誉会員に皇族を推戴し、会長・理事・評議員などがその運営にあたりました。内務大臣の呼びかけによって、各県に支部を設けたほか、朝鮮本部、台湾支部も設置されました。

下田歌子は、創立当初より評議員を務め、大正9(1920)年に第5代会長に就任します。下田歌子67歳の時です。就任の数年前より、軍人援護事業のみでは社会の要望に応えられないことへの行き詰まりもあり、会の解散説すら出始めた時期でした。下田歌子は、就任後、速やかに社会への救済事業に乗り出します。まず会の趣旨を広めるため、翌年の大正10年より全国で講演会を開催します。8月には、北海道および樺太、10月には京城(ソウル)での朝鮮本部総会に出席し、奉天、大連にも足をのぼしています。この間、講演は30数回を数え、翌年には、関東、九州地区を中心に講演50回に及びました。任期が終わる頃の昭和元(1926)年12月末には、会員数が39万余名も増加しています。また会の機構改革を行い、本部新事業として、婦人職業相談所(紹介所)、授産所の開設(内職の斡旋)、夜間女学校の開設、大正12年の関東大震災後には、罹災者救済の恒久施設を被害の甚だしかった本所に開設しました。この「隣保館」には、婦人宿泊施設、職業紹介所、託児所、児童図書館などが設置されていました。

また、関東大震災では、「震災臨時救護班」を組織し、地方各支部へ救護金品の募集を打電、本部事務所を開放して、罹災者を収容するとともに、医療活動、周辺住民への炊き出しなどを行っています。そのほか衣類・夜具の不足を補うため、地方各支部より木綿反物の供出を受け、呉服店からも生地的大量買い付けを行って、本部授産所は裁縫所となり、市民に配布された衣類だけでも200万点に達したといわれています。実践女学校の生徒もこの衣服作製に協力しました。しかし、高齢のため再任を固辞し、昭和2年4月会長職を辞しました。

会の再興と、社会救済事業への拡大を果たした任期6年7ヵ月だったといえます。

1. 寄付褒状〈2232〉

日本赤十字社 下田歌子宛 1通 21.5×30.5 cm
明治27(1894)年9月20日 日清交戦傷病兵救護資金3円

下田歌子は、欧州列強注視の中、アジアの民族同士が戦うこの戦争について嘆いていました。愛国婦人会創立以前から、奥村五百子とは、中国における日本兵の惨状について話し合ったといわれています。明治33(1900)年、五百子が、中国南部への視察に出発する際には、和歌一首「日の本の まことの種子を もろこしの原にもうえよ 大和なでしこ」をはなむけに贈っています。

2. 辞令〈2228〉

愛国婦人会 下田歌子宛 1枚 21.2×31.0 cm 大正9(1920)年 会長[職]

下田歌子は、前会長浜尾作子(浜尾新男爵夫人)の後を受けて、第5代会長に就任します。初めての華胄界以外からの就任でした。副会長には本野久子がつき、会創立から20年間の事業支出が250万4千円であるのに対し、任期6年7ヵ月の間に、213万4千円の事業支出を行っています。いかに広汎な社会救済事業を展開したかが、このことからうかがえます。

3. 愛国婦人会役員と共に(複写)〈1871〉

写真1枚 原本:[大正9(1920)年] 本学図書館所蔵

前列左より、金子多津子監事、長田仲子評議員、本野久子副会長、下田歌子会長、早川里子監事。

4. 功労感謝状〈787〉

愛国婦人会会長下田歌子 台南州部長 枝千代子宛 1枚 18.7×53.3 cm
書簡1通(封筒共) 大正10(1921)年10月14日

台湾支部には、大正9(1920)年5月「女子職業女学校」が開設されています。昭和8(1933)年5月には、会の定款を一部改正して、満州と台湾に本部が設置されました。

5. 清浦奎吾書簡 下田歌子宛〈2171〉

1通 大正9(1920)年12月11日

愛国婦人会の事業について助言。

清浦奎吾(1850-1942)は、明治33(1900)年10月まで、第二次山縣内閣の司法大臣、愛国婦人会発足後の明治34年6月より第1次桂内閣の法相に就任しました。大正13(1924)年には清浦内閣を組閣しています。夫人の清浦鍊子は、愛国婦人会創立から評議員。夫婦とも下田歌子と親しく、清浦鍊子は、下田歌子が校長を務めた順心女学校(現在、広尾学園)の設立者の1人でもあります。

6. 愛国婦人会第20回通常総会奉答文〈2227〉

会長 下田歌子 草稿(会務大要・会員数・収支報告)
大正10(1921)年5月7日

第20回総会は、貞明皇后陛下の行啓および閑院宮妃総裁の台臨を賜り、開催されました。

7. 閑院宮邸前にて (複写) 〈2794〉

写真1枚 原本：[大正10(1921)年頃] 本学図書館所蔵
載仁親王・同妃(愛国婦人会総裁)ほか20数名

ことひと
載仁親王(1865-1945)は、伏見宮邦家親王の第十六子。幼名易宮。明治5(1872)年、閑院宮家を継承、明治11年親王となり、名を載仁と賜ります。陸軍軍人として、大正元年大将、大正8年元帥を務めます。昭和20(1945)年5月病没。閑院宮妃千恵子殿下は、愛国婦人会初代総裁。任期は、明治36年3月より大正13(1924)年4月までの20余年に及びます。

8. 函館・樺太支部総会の途次、 小樽の金子伯邸にて (複写) 〈2795〉

写真1枚 原本：[大正10(1921)年9月] 本学図書館所蔵

金子堅太郎(1853-1942)は、明治から昭和前期の伊藤博文直系の官僚・政治家です。昭和9(1934)年伯爵、このときは子爵でした。

9. 樺太支部総会の途次、盛岡市公園にて (複写) 〈2797〉

写真1枚 原本：大正10(1921)年9月 本学図書館所蔵
岩手県支部の役員と共に

柿沼醇子岩手県支部長は、柿沼竹雄岩手県知事夫人です。愛国婦人会の各支部の顧問のほとんどが県知事、そして支部長をその夫人が務めています。

10. 盛岡市講演会にて (複写) 〈2798〉

写真1枚 原本：大正10(1921)年9月 本学図書館所蔵

満場の講堂で、講演を行っている下田歌子の写真です。

11. 会長朝鮮満州其の他出張日程 〈589〉

大正10(1921)年 謄写版3枚(1綴) 半切24.0×16.5cm

10月1日の東京出発から、10月5日の朝鮮本部総会および朝鮮・満州各地で講演を行っています。帰路の岡山でも講演を行い、10月23日東京に帰着しています。

12. 愛国婦人会朝鮮本部 第4回総会にて (複写) 〈2799-2801〉

写真4枚 原本：大正10(1921)年 本学図書館所蔵

京城(ソウル)でのスナップです。

13. 朝鮮総督府政務監水野邸にて (複写) 〈2803〉

写真1枚 原本：大正10(1921)年 本学図書館所蔵

本野久子副会長・長田仲子・水野万寿子評議員ほか愛国婦人会役員と共に。水野錬太郎朝鮮総督府政務総監は写っていません。

水野錬太郎(1868-1949)は、明治から昭和期にかけての内務官僚・政治家で、大正8(1919)年8月に朝鮮総督府政務総監に就任しました。同11年6月に加藤友三郎内閣の内務大臣に就任しているので、その間の写真と思えます。水野万寿子は、その夫人です。

14. 愛国婦人会朝鮮本部総会の途次 (複写) 〈2812〉

写真1枚 原本：大正10(1921)年 本学図書館所蔵

朝鮮支部会場前にて、下田会長を中心として100名以上の集合写真です。

15. 書幅 朝鮮の田舎にものしける折に 〈937〉

1幅 118.0×35.9cm 大正10(1921)年 絹本墨書

「かさゝぎの むれてなきたつ 朝川を
白き衣増し ひとわたる見ゆ」

大正10(1921)年の朝鮮本部総会に出席の途次に詠まれた和歌です。

16. 満州遊説の途次早川満鉄総裁邸にて (複写) 〈2813〉

写真1枚 原本：大正10(1921)年 本学図書館所蔵

前列右より早川満鉄総裁、下田会長、早川里子監事。

早川千吉郎(1863-1922)は、明治期の大蔵官僚で、大正期には、三井銀行の経営に携わりました。大正10(1921)年に南満州鉄道の総裁に就任しましたが、翌年11月大連で死去しています。愛国婦人会監事早川里子はその夫人です。

17. 書名寄せ書 愛国婦人会役員 〈2722〉

色紙 27.0×24.0cm [大正12(1923)年]

下田歌子古稀の賀に 下田歌子・吉岡弥生・鳩山春子・水野万寿子等35名。

吉岡弥生は、東京女医学校(東京女子医科大学)の創設者、鳩山春子は、共立高等女学校(現在の共立女子学園)の創設者です。

18. 愛国婦人会本部総会

総裁東伏見宮依仁親王妃周子殿下台臨 (複写) 〈3255〉

写真1枚 原本：大正13(1924)年10月 本学図書館所蔵

愛国婦人会託児所で、児童の遊戯を見学のご様子です。

東伏見宮依仁親王妃周子殿下は大正13(1924)年4月に愛国婦人会第2代総裁に就任しました。東伏見宮家は、伏見宮邦家親王の第十七子依仁親王の創立した宮家で、親王は海軍に従事して海軍大将に累進、元帥府に列せられ、大正11年に死去しました。周子殿下は、昭和22(1947)年10月皇籍離脱、東伏見氏を称しました。

19. 下田歌子書簡 近衛貞子宛 〈1022〉

1通 [大正15(1926)年秋]

「公の事は嘉納須磨子と柿沼総長に任せて沈黙を守りたいし。」
和歌2首を添えます。

近衛貞子は、「愛国婦人会」の命名者近衛篤磨の夫人で、愛国婦人会の創立時からの理事です。嘉納須磨子は、講道館柔道の創始者嘉納治五郎夫人で、下田歌子が引き合わせたといわれています。創立時の愛国婦人会評議員で、近衛貞子と共に、華族女学校を明治25(1892)年に卒業しています。柿沼竹雄は前岩手県知事で、事務総長として、大正12(1923)年11月より昭和6(1931)年10月まで在任しました。

20. 愛国婦人会役員に囲まれて (複写) <2825>

写真1枚 原本:[昭和11(1936)年] 本学図書館所蔵

実践女学校礼法室にて 右より坂寄美都子・早川里子・本野久子・下田歌子・伊集院繁子・嘉納須磨子・近衛貞子、後列左より大倉繁子、水野万寿子など10名の集合写真です。

21. 愛国婦人会創立35年記念式典祝辞 <178>

下田歌子 [昭和11(1936)年] 自筆原稿ペン書
下田用箋4枚1綴 19.2×13.2cm

昭和11(1936)年3月2日開催予定の愛国婦人会創立35年記念式典は、2.26事件のため中止されましたが、本野久子会長が総裁東伏見宮妃邸、前総裁閑院宮妃邸を訪問して記念品の贈呈をしました。功労者表彰は実施いたしました。

22. 水野ます子書簡 下田歌子宛 <343>

1通 [昭和前期]7月6日

愛国婦人会内部の問題についての書簡。

水野万寿子は、第7代愛国婦人会会長。昭和17(1942)年に愛国婦人会創立40周年記念式典を挙行し、その事業として、『愛国婦人会四十年史』、『愛国婦人会創立四十周年記念写真帖』を刊行しています。下田歌子会長職辞任後、第6代本野久子会長のもとで、副会長を勤めています。昭和14年9月本野久子会長辞任に伴い、会長に就任しています。

夜間女学校

下田歌子は、小学校卒業後、向学の志を果たせない勤労女子のために、夜間女学校を数多く設置申請しており、その大半が、修業年限2年から4年、授業料も不要か、極めて低額で、高等女学校卒業程度の学力を身につけさせるというものでした。下田歌子は、美濃国岩村藩士の家庭に育ちましたが、父親の幽閉蟄居などで、生活は困窮したといわれています。そのような幼少期が、困窮した女子の教育に向かわせたのかもしれませんが。

慈善女学校

慈善女学校は、明治32(1899)年帝国婦人協会(本学母体)設立時に、実践女学校の附属として構想されました。その趣旨は、「孤独貧困ナル女子ヲ教育シテ、之ニ自活ノ道ヲ授ク」というイギリスの慈善学校(charity school)を模したものでした。帝国婦人協会の設立意図である中産階級以下の、貧しいが、向学心のある女子への教育を具現化したものです。その内容は、年限3カ年の簡易科課程で、修身、読書、算術、地歴、習字の5教科で、授業料の規程はなく、教科用具一式は貸与(授与)されました。入学定員20名で開講しましたが、長く続かず、明治38年の実践女学校規則改正の第2条で、「孤独貧困ナル女子ヲ教養シテ、之ニ自活ノ道ヲ授ケンガ為メ、本校ハ若干ノ貸費生ヲ置ク」と附言するに至ります。

明德女学校(通信省附属)

大正10(1921)年設立。通信省貯金局の女子事務員のための夜間学校で、学費不要。東京・京橋区木挽町の通信省貯金局内に設置されました。校長下田歌子のほか、実践女学校の教員が多く兼務していました。この設立の年は、愛国婦人会会長として、全国遊説など多忙を極めた時でもありました。

25. 「慈善女学校」設立趣意書 <71>

[明治32(1899)年] 草稿 下田歌子加筆 罫紙 1綴 25.0×17.3cm

26. 慈善女学校設立願(複写) <1884>

下田歌子 東京府知事宛 1綴
原本:明治32(1899)年5月1日 東京都公文書館所蔵
許可願・教科用図書目録・校舎及び運動場図・学校規則

23. 雑誌『愛国婦人』

471号(大正10年7月) <4037>

473号(大正10年9月) <4039>

477号(大正11年1月) <4041>

3冊 大正10(1921)・大正11(1922)年 22cm

会創立後の明治35(1902)年3月の評議員会で、機関紙『愛国婦人』の発行を決議し、代金1回郵税共で3銭(会員外3銭5厘)1ヵ月2回刊行し、軌道にのれば、週刊の計画でした。『愛国婦人』第1号は、3月27日に発刊されました。『愛国婦人』の表紙の題字は、近衛篤磨が揮毫し、祝辞を岩倉久子初代会長が寄せています。大正9(1920)年からは、菊版に改め、月刊としました。

24. 雑誌『愛国婦人』臨時増刊号『婦人の慰問使』

87号(明治38年9月) <3988>

1冊 19cm

口絵写真の右から2人目の老婦人が奥村五百子です。慰問使として、中国視察の際に撮影されたものです。

27. 明德女学校設立申請(複写) <1933>

下田歌子 東京府知事宛 1綴
原本:大正10(1921)年4月30日 東京都公文書館所蔵
申請書・学則・経費及び維持方法・収支予算・下田歌子履歴書並調査書・郵便貯金局舎使用許可等

愛国夜間女学校（愛国婦人会）

愛国夜間女学校は、大正13（1924）年、麹町区飯田町1丁目牛ヶ淵の（社団法人）愛国婦人会の構内に設立されました。前年の関東大震災によって、学業を断念せざるを得ない事情に至る女子が多かったため、愛国婦人会は設立を決意し、会長下田歌子が校長を務めました。夜間授業の時間は午後5時から8時の3時間、修業期間3ヵ年で、その内容は、高等女学校の程度に準ずる本科と、裁縫、家事に重きを置く1ヵ年の簡易科を設置しています。また学費不要で、教科書、文具一切貸与し、ただ雑費として月30銭の納付がありましたが、事情により免除特典が与えられました。希望者が殺到したといわれています。

文化夜間女学校

大正11（1922）年に順心女学校内に設立しました。設立者の太田虎一、吉瀬鋭吉は、実践・順心女学校の両校教諭を兼任しました。下田歌子は顧問となり、修身を教えるほか、多数の教員が実践・順心女学校の両校の兼任でした。順心女学校は、大正7年、愛国婦人会役員の板垣絹子（板垣退助夫人）、清浦錬子（清浦奎吾夫人）などが設立した大日本婦人慈善会（主に女子受刑者の乳児保育の改善事業から出発して、社会での女子矯正、社会事業を展開。後に大日本婦人共愛会と改名）が設立母体で、下田歌子を校長としました。大正13年に順心高等女学校を設立し、順心女学校は「夜間女学校」に変更され、昭和8（1933）年まで続きました。夜間女学校への変更の理由は、関東大震災後、進学を閉ざされた女子に対する門戸の開放であったといわれています。

文化女学校

設立者吉瀬鋭吉が、順心女学校内より文化夜間女学校を東京・芝区に移転させた形をとり、開校しました。当初「文化家政女学校」と言っていたのですが、昭和3（1928）年に「文化女学校」と名称変更を行い、夜間女学校ではなくなりました。やはり、校長以下多くの教員が、実践・順心女学校の両校の兼任でした。

実践女学校夜間女学部

申請には、実践実科高等女学校の施設を利用して、修業期間4ヵ年、「高等女学校程度ノ教育ヲ授ク」とあります。昭和2（1927）年愛国婦人会退任後、再び夜間女学校の申請をしたこととなります。申請後、昭和4年1月に認可されました。下田歌子は、昭和11年10月8日に亡くなりますが、女子教育への熱意が最後まで衰えない晩年と言えます。

28. 愛国夜間女学校設立認可願（複写）〈878〉

下田歌子 東京府知事宛 1綴
原本：大正13（1924）年3月 東京都公文書館所蔵
申請書・学則・経費予算書・愛国婦人会定款及び財産目録・土地契約書
書写・校舎位置並びに平面図ほか

29. 愛国夜間女学校校長認可申請（複写）〈1947〉

下田歌子 東京府知事宛 1綴
原本：大正13（1924）年5月6日 東京都公文書館所蔵
申請書・下田歌子履歴書・身分証明書ほか

30. 本野久子書簡 下田歌子宛 〈353〉

1通 昭和7（1932）年4月1日

夜間女学校の名誉校長について。

本野久子は、下田歌子が会長就任時から副会長を務め、常に行動をともにしていました。昭和2（1927）年、下田歌子の辞任の後を受けて、第6代愛国婦人会に就任しました。愛国夜間女学校校長も辞した下田歌子に名誉校長を懇願する書簡となっています。

31. 文化夜間女学校設立願（複写）〈1945〉

設立者 太田虎一・吉瀬鋭吉 東京府知事宛 1綴
原本：大正11（1922）年4月1日 東京都公文書館所蔵
申請書・備品目録・予算・維持方法・学則・本校ノ特質ニ関スル説明・職員・設立者履歴書・大日本婦人慈善会との契約書ほか

32. 和歌下書「うみさちも・・・」〈2488〉

文化夜間女学校の同窓会誌の初刊に
下田用箋1枚 25.0×17.5cm [大正末年]
「うみさちも えよとぞ祈る 小春日の
和めるおきに いづるともふね」

33. 文化夜間女学校校舎移転届（複写）〈1981〉

設立代表者 吉瀬鋭吉 東京府知事宛
原本：昭和2（1927）年3月2日 東京都公文書館所蔵

34. 文化家政女学校校名変更・学則改正申請（複写）〈2716〉

設立代表者 吉瀬鋭吉 東京府知事宛 1綴（19枚）
原本：昭和3（1928）年8月27日 東京都公文書館所蔵

35. 夜間女学部設置認可申請書（複写）〈1996〉

設立者 下田歌子 1綴（24枚）
原本：昭和3（1928）年11月28日 東京都公文書館所蔵